

Viva Kango

No.41

Campus News of Japanese Red Cross Hokkaido College of Nursing

〒090-0011 北海道北見市曙町664-1 TEL (0157) 66-3311 FAX (0157) 61-3125
mail to:kouhou@rchokkaido-cn.ac.jp http://www.rchokkaido-cn.ac.jp

発行日/2015年3月31日
編集・発行/広報委員会



日本赤十字北海道看護大学

助産師としての活躍 卒業生からのメッセージ

「助産師の魅力について」

相原 佐知子

現在、千葉県のクリニックで助産師として勤務しております。

先日、なぜか大学同級生T君の同僚の分娩介助をさせていただきました。お産後、患者様から職場を聞くとT君と同じで驚きました。妊娠中はT君から『無理は絶対しちゃダメだよ。自分の身体を一番に考えてね。』と話しかけてもらえたとお話されていました。不思議な縁も感じ、優しい同級生を誇りに感じ、助産師はそれくらい魅力あるお仕事です。

この数日、助産師の魅力について考えていますが、魅力を言葉にするのはとても難しいように感じます。私自身は助産師の魅力について語る事ができるほど成長してはならず、



診療所にいく恐怖感はありませんでしたが、同級生のYさんから『診療所で産む人が多いのに、それを知らないで助産師とは言えない』という一言が背中を押してくれました。現在、診療所の中ではまだまだ若手に位置し、周りに支えていただき勤務しています。看護師業務に追われ分娩介助をしていた北海道での勤務時代、理想を追求した東京で

の勤務経験があるからこそ、今の環境で勤務できているのだと思います。

学習して時代の変化に対応できなければ患者さんに苦痛をもたらすケアを続けることになりません。

理想を追求すると、周産期は患者さん自身が修行僧のようになり、制約と変化が増え、息苦しくなっていくのです。もちろん患者さんに理想を求めて、想像していた結果や反応が得られない場合は助産師自身も苦しくなります。

今の職場ではじめて個々に合わせた対応ができるようになりました。そして『無理はしないで。一番大切なのは長い育児期間、ママが幸せで楽できること。』と言えるようになりました。そして、結婚、出産、離婚、育児など様々な苦難(?)を乗り越えていない私だからこそ『こんな職業の私でも保健師さんや看護師さんに相談して頼ってばかりいます。つらいときは地域の医療者が味方になってくれますからね。』と伝えることもできます。

理想の助産師像なく助産師になったため、たどつく場所や満足できる結果はありませんが、臨床経験のみが私を成長させてくれてます。本からは学べないこと、他者に伝えるには難しい自然に得た感覚を手に感じる事ができます。

今後、経験をつめば皆様に助産師の魅力をしっかりと伝えられる日がくるかもしれません。今は産婦さんの二人目、三人目を分娩介助する機会もあります。『前の子も助産師さ



んだっただけです！』と、安心したよなお顔を言っていたら、と大きな喜びを感じます。きっと分娩介助した子供が産む時代がきたら、また新たな魅力を感じる事ができると思います。

産科は生だけでなく死もあります。小児科医がないクリニックに不安を感じ、NICUにも行きたい、周産期センターでも勤務したい。そんな思いにかられることがたびたびあります。総合病院ならば私がほしい環境が整うかもしれませんが、しかし環境ではなく自分が変わらなければ何も変わらないという思いもあります。

もうお亡くなりになった流通ジャーナリストの金子哲雄さんの本に、いくつもの専門病院や大学病院を訪ね歩いたけど助からない患者だから冷たい態度をとられたり拒否された、でもあるクリニックにたどり着いて、『医療技術の前に人柄に救われた。癒された。』と書いてありました。クリニックにしかできないあなたかい医療があるはず。今、与えられた環境が必要とされるよう今後も努力してまいります。

「憧れの助産師になるために」

西 濟 遥 香

皆様、こんにちは。私は、平成二七年三月に本大学院を修了した西濟遥香です。私は、二年前に本学を卒業し、助産師になるために本大学院に入学しました。ここでは、私が助産師になるまでの経緯について話をさせていただきます、助産師を目指す人達へ少しでも参考になればと思っています。

私は、中学生の時から、子どもに携わる仕事がしたいと思っており、授業で分娩のビデオを見て、助産師という仕事を知り、助産師になるのもいいなと思ようになりました。高校に入学してもその気持ちは変わらず過ごしており、職業体験で病院の産科に見学に行き、新生児を抱かせていただいたり、沐浴を見学するなどの体験を通じて助産師になりました。

いと思い、将来の夢となりました。

本学を目指すきっかけは、大学期間内に助産師も取得できるカリキュラムがあったことです。しかし、私たちが一つの学年からそのカリキュラムがなくなってしまう、一度は他大学に進学することも考えましたが、本学は地元であったことから、入学することを決意しました。大学の授業や実習以外で、助産師になるために役に立ったと感じていることは、ピア子サークルに入ったことです。

サークルでは、高校へ出前授業に行き、性教育を行いました。直接高校生達と向きあい、性に対する考え方などの話を聞き、その経験から思春期の男女への教育の必要性を再認識し、助産師になり思春期にある人達に対しても支援していきたいと感じました。

ました。

大学三年の後半頃から、具体的に助産師になるためにどうしていくかを悩み始めました。進学して大学同期の友人達から遅れて就職するのは、出遅れてしまうと感じ一度就職してから進学しようか、一年制の学校に行けばそんなに遅れた感はないのではないかと、本大学院に進学した方が二年間と期間は長い慣れた環境で学習できるのではないかと、親や友人、教員に相談しながら、様々なことを考えました。最終的には、友人も本大学院への入学を希望しており、就職先も同じであったことから、支え合いながら学習していけるのではないかと感じ、本大学院へ入学しました。

大学院の授業は、学生が少人数であるため、参加型の授業であり、自分達がプレゼンをして授業を進行していくこともありました。毎回言っているほど課題が出るため、大変な時は先生と交渉をして期限を延ばしてもらったり、授業の変更をしてもらうなど、ただ与えられたものをやるのではなく、自分達の能力や負担を考えて、授業を行っていかれることが、学部の時とは違うと感じたことです。

実習は、妊娠・分娩・産褥期実習の他に、妊娠前から産褥期、家庭訪問、一カ月健診まで、一人の女性と児を継続してみている継続実習、四カ月健診、ハイリスク妊婦・新生児、助産所実習がありました。実習で一番記憶に残っていることは分娩実習です。分娩実習では、学生一人で十人の分娩介助を行わなければなりません。分娩見学した際は、児が生ま

れた瞬間感動して泣き

そうになりましたが、自分が介助を行う際は、自分のことで精一杯で、無事生まれて良かったという感情はあるものの、次にあれをしなきゃ、これをしなきゃと考えるばかりで、焦っていたという記憶しかありません。しかし、生まれて一段落して、褥婦さんと話をして、学生の私に対してもありがとうと言ってくださり、児を抱っこして無事生まれてきたな、かわいいなと思ひ、感動し、助産師という仕事は良い仕事だなと感じました。しかし、実習ではローリスクの産婦を担当しますが、分娩が進行する中で異常がある場合もあります。私が受け持った産婦さんで、分娩中、血圧が低下し、意識も遠くなり、出血量が多く輸血が必要になった方がいました。その他には、児の心音が低下し、NICUに入院するという事例もありました。皆さん母子ともに無事でしたが、私は母子の命に携わるという怖さを知りました。産婦さんの出血量が多く、意識が遠くなるのを見た時は、怖くなり、泣いてしまいました。その場にいらなくなってしまうました。しかし、命の危険を感じた経験が、異常の可能性の判断、早期発見に繋がると感じており、学生の時



に経験ができて良かったと思っています。

今日、望まない妊娠をする女性や、子どもを虐待する母親もおり、保健指導や育児支援が重要であると考えます。助産師の主な仕事は、妊娠期から産褥一カ月までの支援ですが、私は、大学や大学院で学んだことを活かし、妊娠前の女性に対しての性教育や、産褥一カ月以降の母親に対しての育児サポートにも力を入れたいと思います。



北見市健康まつり

北見市健康まつりは平成二十六年十月五日（日）に北見市民会館にて開催され、子どもから高齢者まで延べ二、三五百人の参加がありました。今年のテーマは「明日の自分に、健康宣言！」で、健康チェック・健康相談や野菜直売など健康に関連した多くのコーナーが設けられました。

本学は「からだのしくみはおもしろい」と題したコーナーを担当し、赤ちゃんモデルに触れる、聴診器で自身の心音を聴く、心臓や骨などの人体モデルに触れる体験を行いました。人体モデルは学生が授業の際に用いるリアルなもので、参加者の関心を引きました。また、赤ちゃんを抱っこして微笑んだりする様子から楽しんでいただけだと思っています。当日は十名の学生がボランティアとして活躍しました。



第十回「ぼうさい甲子園（二七防災未来賞）」

大学部門・奨励賞 受賞

第十回「ぼうさい甲子園（二七防災未来賞）」において本学災害研究の研究会が大学部門の奨励賞を受賞いたしました。

ぼうさい甲子園は、兵庫県や毎日新聞社などが主催しています。阪神大震災の経験と教訓を未来に継承するために開催しており、小学生、中学生、高校生、大学生の四部門において、本年は計一三一団体が応募してありました。「地域性」「獨創性」「自主性」「継続性」の四つの観点から審査されています。

本学災害研究の研究会は、二〇一〇年に発足以来、北海道をはじめとする積雪寒冷地域の冬期被災を想定した検証を実施しています。また、二〇一一年八月からは、岩手



防災力強化県民運動ポスターコンクール



県陸前高田市の子どもたちへの学習支援活動「楽習会」を春・夏・冬の年三回、継続して実施しています。

今回の受賞は、厳冬の避難所設置に関する検討や暴風雪で車内に閉じ込められた際の対応方法など、地域課題解決型の継続的な取り組みが評価されました。

大学部門において奨励賞を受賞した本学災害研究の研究会は、二年生の岩崎勝悟君が代表として出席し、毎日新聞大阪本社編集局長の小菅洋人様より表彰状を受け取りました。表彰式の前行われた「防災未来宣言」では、岩崎君がポスターセッションを行い、赤十字のキャッチフレーズ「Our World. Your move.」を引用して、一人ひとりの行動（防災への取り組み）が私たちの世界を良くしていくことを訴えました。

平成二十六年 保護者会

保護者会

十月十九日、本学において保護者会が開催されました。

昨年まで「保護者懇談会」としておりましたが、保護者の皆様に広い意味で本学を知っていただきたいという思いから、保護者会とさせていただきます。また、例年よりも一カ月早く開催し、学生の成績、単位取得状況を最大限早くお伝えすることができるようになりました。

合計八十三組百十五名の保護者の皆様に参加してくださいました。アンケートを取らせていただいたところ、満足していただけた保護者の方が多かったです。ただ、もっと大学のことを知りたいという保護者の方もいらっしゃいましたので、今後、さらに情報発信をしなければという思いを強くしました。来年度も保護者の皆様のお越しをお待ちしております。